

最新医療の現場



早期発見の肺がんの効果的な治療、 『光線力学療法』と『胸腔鏡手術』

徳島大学病院 呼吸器外科長 先山 正二 さきやま しょうじ

■問い合わせ 呼吸器外科外来受付 Tel.088-633-7136

■肺がん治療の現状

肺がんは非常に治療が難しく、年間約6万人の方がこれにより亡くなっています。肺がん患者さんの高齢化の問題もあり、手術が可能なのは全体の3割程度でした。しかし、最近では検査段階で、より高解像度の画像診断などで、肺がんの早期発見も可能になり、それに伴って安全性・根治性・低侵襲性のある治療法が考えられています。根治性とは、がんを完全になくそうとすること、低侵襲性とは、手術や処置などの際、必要最小限の切除などに留め患者さんの負担を少なくすることで、現在の治療では、それを目標としています。

■光線力学療法

(PDT : Photodynamic Therapy)

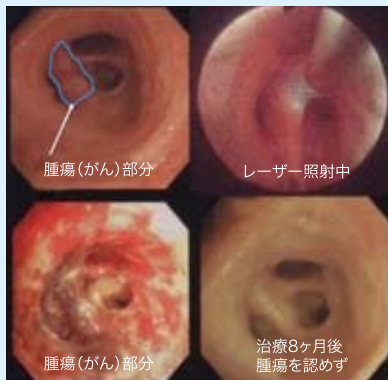
早期の肺がん治療の第一選択は手術ですが、気管支鏡で観察できる比較的太い気管支にできた早期がん(中心型早期肺がん)は、PDTと呼ばれているレーザー治療のみで根治できる可能性があります。局所麻酔下に、気管支鏡を口から喉を通して気管支に入れ、そこからレーザーを照射して治療します。先に光感受性物質を投与し、4~6時間ほど待ちます。この物質は腫瘍親和性物質のため、肺がんの箇所によく残存します。そこへ低出力レーザーを照射す

ると、化学反応が起こり、腫瘍のみにダメージを与えることができます。周りの組織へも、また体力的にも負担がかなり少ない治療法のため、肺気腫を有して呼吸機能が低下した肺がん患者の方にも有効な方法です。ただし、投与後は皮膚が光に過敏になっているため、治療後少なくとも1週間程度、直射日光を避ける必要があります。

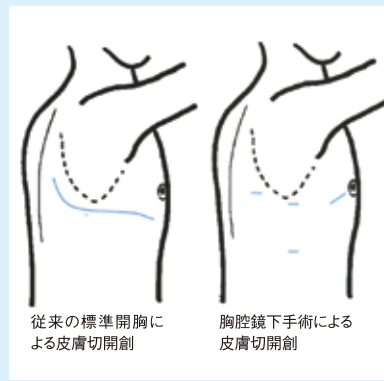
■胸腔鏡手術とは

また、10年ほど前から内視鏡手術の一種である、胸腔鏡手術も可能になりました。以前の肺がんの手術の際は、大きな傷(切開)が必要でし

た。しかし、最近はリンパ節などへの転移のない肺がん(1期肺がん)に対しては胸腔鏡手術を行っています。症例によっては、15~20ミリ程度の穴(傷)を3、4カ所あけて以前と同じ内容の手術ができます。これらの穴から、ビデオスコープと手術器具を胸の中(胸腔)に入れて、ビデオスコープで映される画面を見ながら手術をします。この方法では、皮膚のみならず、筋肉もほとんど切る必要がなく、肋骨も切りませんので、術後の負担はかなり軽減されます。このように、肺がんの進み具合を十分に評価した上で、根治性を担保しつつ、より低侵襲の治療法を選択できるようになりました。



▲早期がんに対する、光線力学療法による処置。



▲肺がん手術時の切開創(図中の青線部分)